

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察，構想する過程を重視する。

用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず，歴史に関わる事象の意味や意義，特色や相互の関連等について，歴史的な見方・考え方を働かせながら，概念などを活用して多面的・多角的に考察したり，課題の解決を視野に入れて構想したりする力を求める。『歴史総合，日本史探究』及び『歴史総合，世界史探究』では，「歴史総合」で学習したことから，それを基に「日本史探究」又は「世界史探究」で学習したことを問う。

問題の作成に当たっては，事象に関する深い理解を伴った知識を活用して，例えば，教科書等で扱われていない資料であっても，そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題や，仮説を立てて資料に基づき根拠を示したり検証したりする問題，時代や地域を超えて特定のテーマについて考察する問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問

『地理総合／歴史総合／公共』の「歴史総合」の第1問と同じ。

第2問

「時代によって建築物や都市空間の持つ意味や利用方法がどのように変化したのか」をテーマとした。Aでは，中国河北省にある，定州開元寺塔（瞭敵塔）の写真及び周辺地図を素材とし，世界史で学んできた知識と資料から読み取った内容とを関連付けて考察する力を問うた。Bでは，サンタンジェロ城と資料を手掛かりにヨーロッパ史の展開についての知識を問うた。正答率・識別力について妥当な範囲であった。Cでは，ラテンアメリカにおける先住民文明についての内容的理解，及び近代メキシコの歴史についての内容的理解を問うた。いずれの小問についても，正答率・識別力の点で妥当であった。

第3問

世界史の中で，人物や時代，出来事の評価や解釈が変わる場合についての探究という形式で出題した。Aでは古代ギリシアを取り上げ，とりわけアリストファネスの喜劇を題材としながら，資料から，必要な情報を読み取り，複数の歴史的事象を比較などして得た類似・差異等に着眼して，特徴を考察する力について問うた。Bは，中世という言葉について会話をしている場面を基にした出題で，問3は基礎的知識と資料からの読み取りで，ペトラルカとヴォルテールについて正文を選択できるかどうかを問うた。問4は中世ヨーロッパの主要な出来事の意味を概念的に捉える力を問うた。それぞれの小問について正答率・識別力の点で妥当であった。Cでは，インド大反乱についての資料から適切に情報を読み取り，南アジアにおける民族独立運動に関する内容的理解と歴史的事象相互のつながりに着目し，その関連（背景）を考察する力を問うた。教科書的知識とは異なる理解を問うた，Aの問1において，わずかに識別力が低い傾向が見られ，更なる問い方の工夫の必要を感じるものの，それ以外の問いについてはおおむね正答率・識別力の点で妥当であった。

第4問

「世界史上における知識や情報の伝播」をテーマとした。Aでは，資料と地図を素材として，イスラーム文化に関する内容的理解や，サハラ以南アフリカに関する地理的理解，地図や資料

などから必要な情報を読み取る力を問うた。Bでは、江戸幕府に仕えた新井白石が、同時期のヨーロッパの情勢について記した『西洋紀聞』を取り上げ、スペイン継承戦争を中心としたヨーロッパ国際情勢とカトリック改革に関する内容的理解、資料から必要な情報を読み取る能力、読み取った情報を目的に応じてまとめる力を問うた。Cは、キプリングの小説「ストゥーの家にて」とグラフを基に、問5では、英領インドにおける鉄道網と電信網の特徴や、問6では、英露帝国外交史について考察する力を問うた。問7では、歴史上に見られた情報や技術の伝播について内容を理解できているかを問うた。いずれの小問についても極端な解答結果は出でず、正答率・識別力の点で妥当であった。

第5問

「経済活動と社会の変化」をテーマとし、問1は古代朝鮮半島における中国商人の活動、問2は北米大陸におけるイギリスやフランスの経済活動が先住民社会にもたらした変化、問3はアメリカの西部開拓、問4は東南アジアにおける交易の変化について、資料などをもとに選択させる問題とした。問5では、東ヨーロッパの社会的状況を問い、各班の資料から読み取れる情報を照合し、考察する問題である。正答率・識別力とも、おおむね妥当と考えられる。

3 自己評価及び出題に対する反響・意見等についての見解

第1問

『地理総合／歴史総合／公共』の「歴史総合」の第1問と同じ。

第2問

Aでは、問1について、年代順配列によって中国における宗教の変遷について思考力・判断力・表現力等を問う問題との評価を得た。問2について、地図の使い方に工夫がみられる良問との評価を得た。知識を問う問題と知識を用いて思考する問題を組み合わせた良問との評価であったので、引き続き、地図を積極的に活用し、思考力や判断力等を問えるように出題形式を工夫していきたい。Bについては、知識と技能を問う一方で「思考力・判断力・表現力等を問う問題になり得た点が惜しい」との評価もいただいた。より良い作問に向けて改善に努めたい。Cでは、問6について、選択肢の正誤の判断基準が異なることが指摘され、選択肢の内容を「三文化広場」に関連付けた内容にすれば図4がさらに生かされたろうことが示唆された。今後の選択肢項目の設定の際に考慮したい。

第3問

Aの問1については特に、通常はソフィストと対置されるソクラテスらに対して、資料と対話文から異なる評価に気付かせる良問との評価を受けた。Bでは、問3は、ペトラルカらの中世に対する時代観の背景を考えさせるなど工夫すれば、思考力・判断力・表現力等を問う問題としてより良くなるとの指摘を受けた。既知の知識を問い直させる際、その背景まで考えさせるなど受験者により深く考察を促すよう工夫に努めたい。問4は、4つの事例が中世の政治や経済、文化を示す文で統一されており、中世ヨーロッパ世界の包括的知識を問う良問との評価を受けた。今後も、単なる知識確認にとどまらず知識相互の繋がりを考察させるような工夫をしていきたい。Cでは、問5が下線部について述べた文として誤っているものを選択する知識・技能を問う問題だった。問6が資料2からインド大反乱に関する新たな解釈を得ることで、概念的理解に到達することができる良問であるとの評価を受けた。今後も、さらなる思考力や判断力・表現力等を問えるように、スライドや会話文を積極的に活用し、出題形式を工夫していきたい。

第4問

Aでは、問2について、ニジェール川中流域に位置するトンブクトゥが繁栄した要因を問う問題にすると、受験者の学習の動機付けになり得たのではないかとの指摘を受けた。資料の読み取りが出題意図であったが、それが教科書記述と結びつくような出題を工夫したい。Bは、基礎的な問題であるという評価を受けた一方、問4について、X、Y、Zの文をヨーロッパのキリスト教修道会に関する正命題にして、イエズス会に当てはまるものを選択させるか、3つのうち一つのみを正命題とするかにすれば、測定したい認知が明確になり、より良い知識・技能を問う問題になり得たという評価があった。選択肢の選び方について改善に努めたい。Cの問7では、更なる調査のための課題について選択する問題であるが、歴史的事象の正誤判断になってしまっている点が惜しまれると指摘された。出題形式を含めて、改善に努めたい。

第5問

大問全体の構成としては、初見の資料から得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題として、大問5の問2・3、時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題として、大問5の問4・5があり、『共通テスト問題作成方針』に即した思考力や判断力を評価する出題であるとの評価を得た。また、多様な資料、図版、グラフ、場面設定などを組み合わせた出題形式も評価された。こうした問題形式は、今後も継続させていきたい。

問1・問2は、資料やノート、図の内容が言い換えられているのみの文で選択肢が構成されていたとの指摘を受けた。問1は、基礎知識を踏まえ、歴史資料に書かれていることと書かれていないことを判断することの重要性を再確認させるものであった。問2は、一つを選択肢を除き、教科書知識との組合せや、図内の位置関係を読み解く形で、一定の思考力を必要とする設問を心掛けた。問3は、ノートとグラフから考えられる知識・技能を問う問題との評価を受けた。問4では、パネル中の情報を参照しつつ、基本的な知識・技能を問う問題との評価を受けた。問5は、新たに提示されるスライドの内容と問1～問4が取り上げている事例との類似を問う問題であり、複数の歴史的事象から共通、差異を抽出する良問との評価を得た。

今後も、分量が多くなりすぎないように留意しつつ、こういった問題の出題に努めたい。

4 まとめ

以上、問題作成部会として、各問の出題意図と、設問に対して寄せられた意見・評価に対する見解を述べてきた。最後に総合的な意見・評価についての問題作成部会の見解を述べ、問題作成に当たっての留意点についてまとめておきたい。

2年目を迎えた『歴史総合、世界史探究』の共通テストでも、作題に際しては引き続き、諸事象を文字テキストのみならず、地図や図像、グラフ、表など、様々な情報から探究的に読み取るとともに、それらを世界史の大きな枠組みの中に位置付けていく思考を求めるような設問の作成を意識した。その結果、「資料を丁寧に読ませ深く考察させようとする意図が感じられる」との評価を得ることができた。

今回の作題に当たって特に心掛けたのは、以下の点である。

「世界史探究」の目標に照らして、大問ごとに探究的な共通の学習テーマを設定し、生徒による主体的な探究活動を通して、中間で扱われる個々の事象の比較検討から概念的な理解へと昇華していくことを目指した。また、既習事項と、歴史的な見方・考え方を働かせて各種の資料から読み取られる情報との双方を接合することで、正答に至る設問を追求した。こうした技能は、世界史探究の授業の中でも習熟が求められているものと考えられる。これらについては総じて好意的な評価を得ており、一定の水準には到達したと考えるが、今後も更なる工夫を継続していきたい。

全体的な分量については、作題者側としても大きな課題と捉えていたか、この点についても、「試

験時間に見合った適切なものであった」との評価を得ており，おおむね適正であったと考えられる。

はじめに述べたように，『歴史総合，世界史探究』の共通テストもまだ2年目であり，どのような作題を通して世界史探究の目標に近づくことができるのか，模索の連続であった。今後も引き続き，常に歴史の大きな枠組みを意識しつつ，知識及び技能，思考力・判断力・表現力等を総合的に問うことのできる問題作成に留意していきたい。